

# 和田春樹氏の

## 「拉致疑惑検証」を検証する

藤井一行

### 目次

#### はじめに

- 検証一 金賢姫証言の「検証」
  - 検証二 安明進証言の検証（一）
  - 検証三 安明進証言の検証（二） 間接証言〓伝聞情報
  - 検証四 情報伝達者への疑惑
  - 検証五 批判者にたいする和田氏の反論について
- 終わりに

### はじめに

きっかけは『文芸春秋』一一月号（二〇〇二年）の広告で、四〇年近くまえから旧知のロシア史研究者で、数々のすぐれた研究を世に問うてきた敬愛する和田春樹を糾弾する論文が掲載されているのを知ったことだった。日頃、『文芸春秋』など

ひもどく習慣もない私もこんどばかりはそれが気になった。日本人の北朝鮮拉致問題にかんする日朝政府間交渉の行方には私もえらく興奮して注目し、リアルタイムのテレビ報道を固唾を吞んで見守っていた。犯人が拉致を認め、拉致被害者の運命について告白をしたときには、スターリン政権に感じたのに劣らぬ激怒をおぼえた。それだけに、和田氏が「親朝派知識人、無反省妄言録」の一員にされていた（石井英夫『親朝派知識人、無反省妄言録』同誌、一六五―一六六ページ）ことを見過ごしにできず、自分の眼でその是非を確かめたいと思ったのである。

私が眼を通したのは、和田氏の『「日本人拉致疑惑」を検証する』（『世界』二〇〇一年一月号、二月号、上、下）、『日朝交渉再開は、いま、なぜ必要か』（『世界』二〇〇二年一月号）、『朝鮮有事を望むのか―不審船・拉致疑惑・有事立法を考える』（彩流社、二〇〇二年）である。最初の論文を読み始めてびっくりしたのは、推量語の多さであった。「・・・であろう」、「・・・見える」、「・・・のはずである」がやたらに多いのである。また論証ぬきでの「・・・はおかしい」、「・・・奇妙である」などの疑惑語も多かった。そしてさらに、論証ぬきでの、「・・・創作」とか「見てきたようなフィクション」とかの断定。まさかあの高名の歴史家の和田氏がいかげんなことを言うはずがないと思いつつも、これは検証してみるだけのことはありそうだと考えた。ほかにも氏の恣意的史料操作を問題にする学者がいることもわかったので、なおさらのことであった。

そこで和田氏が検証作業をおこなったほとんどすべての文献にあたってみた。和田氏の結論は、「横田めぐみさんが拉致されたと断定するだけの根拠が存在しないことが明らかである」というものであったが、私の結論は、和田氏がそのような結論をくだす根拠はまったくないというものであった。

拉致犯罪の元凶金正日が自供し、一連の拉致被害者の真実が明らかになった現在では、北朝鮮による拉致疑惑と被害者救済を世に訴え続けてきた人々の主張が正しいこと、逆に和田氏の「検証」が真実を反映していなかったことが明らかになった。

それにもかかわらず、『朝日新聞』（二〇〇二年一〇月七日）への和田氏の寄稿『日朝関係を考える』では、安明進の証言に疑問を呈し、拉致と断定するだけの根

拠はないと「述べてきた者である」とのべるのみで、みずからのそれまでの「検証」作業にも、ましてその当否にもまったく言及していない。結果として拉致は事実とわかったが、自分の「検証」作業それ自体には非がなかった。―ことによると氏はそう考えているのかもしれない。犯人自供後に書かれた『北のペレストロイカは成功するか』（『世界』二〇〇二年一月号）でも、氏は依然として「北から亡命した作業員安明進の証言には疑問が多い」（六五ページ）としている。

そうであれば、歴史の審判に耐え得なかった氏の「検証」作業がいかなるものであったかを吟味することは、なおさら不可欠である。

以下は、その検証報告である。なお検証作業で必要な場合、原文を画像ファイルにリンクさせているが、画像が二ページにわたるような場合、不要部分をカットしたうえで、必要部分をつなぎあわせていることがある。もちろん、文面の加工はない。

## 検証一 金賢姫証言の「検証」

日本人の行方不明者が北朝鮮に拉致されたという疑惑が、多少とも確かな根拠によってづけられ、政府の公認事件となるようになったのは、金賢姫（キム・ヒョンヒ、大韓航空機爆破犯人）と北朝鮮から韓国へ亡命した元工作員の安明進（アン・ミョンジン）の供述・証言によるところが大きい。そのため和田氏の検証作業は、この二人の直接・間接の証言の吟味に集中することになる。

まず和田氏が問題にするのは、金賢姫の証言である。金賢姫には、『金賢姫全告白・いま、女として』（上下、文芸春秋社、一九九一）、『忘れられない女（ひと）・李恩恵先生との二十九月』（文芸春秋社、一九九五）、『愛を感じるとき』（文芸春秋社、文春文庫、一九九五）などの邦訳がある。その中で和田氏はとくに『忘れられない女（ひと）・李恩恵先生との二十九月』に注目する。その手記では、李恩恵から彼女が聞いたという日本人拉致問題について少なくとも六件の情報が記されている（原文画像）。

金正日誕生記念会に日本人夫婦が出ていた。

ある連行者は反抗して満身傷だらけであった。

ある日本人男性は心がきれいで、大工仕事をよく手伝ってくれた。

ある日本人女性は北朝鮮で外国人男性と結婚させられた。

海辺でデートしていた夫婦が拉致され、北朝鮮で結婚式をあげた。

拉致されてきた人の中にまだ高等学校に通っていた少女もいた。

和田氏はそのうち、  
、  
、  
について金のことばをそのまま紹介した上で、「これはすでに問題になっているケースを取り込んで創作した話のように見える」とし、「これは彼女の最初の手記にはまったく出てこなかったことである」とする

（『「日本人拉致疑惑」を検証する』上、六三）。（赤色は藤井、問題部分を以下赤で示す。）

「**創作した話のように見える**」——これがいかに重大な評価であるかは、歴史学者である氏にはよくわかつているはずである。いくら「のように見える」と逃げても許されるようなレッテルではない。和田氏が氏のなにかの記述にたいして「創作した話のように見える」と言われたら、その根拠を示せと迫らないであろうか？しかし、氏はまったくなんの根拠らしきものも示すことなく、そのような判定をくだす（原文画像の2-63）。これが「検証」というものであるだろうか？

また、「すでに問題になっているケース」とはなにをさし、金賢姫はそれをどこから知ったとするのであろうか？

なお、氏はこの論文に補筆して『朝鮮有事を望むのか』に収録した論文では、先の引用部分は「これはすでに**知られている**ケースを取り込んで**述べたもの**のように**思われる**」と修正する（八五）。明らかに、「検証」結果の変更である。「創作した話」という推定を撤回した理由は説明されていない。

また、以上の事件についての伝聞情報が、最初の手記（『金賢姫全告白・いま、女として』）にまったく出てこなかったことに和田氏は疑義を呈しているが、そのことにどんな問題があるのか？

の少女拉致事件についても、氏は「少女拉致の話は金賢姫によつて最初に提起されたのである」と言う。まえに語らなかつたことをあとで語ることがそんなに不思議であろうか？ 歴史研究で個人の回想記などをひもとくとき、それはよく遭遇する現象である。彼女の最初の手記は、航空機爆破事件・逮捕・死刑判決・恩赦が主なテーマである。そこに日本人拉致にかんする伝聞情報が出てこなくても少しも不思議でない。テーマは別である。新しい記述が出てきて当然である。

それよりも、金賢姫が九五年に新たに提供した以上の情報は間接情報とはいえ、きわめて有力な拉致情報であつたはずである。

ところで、和田論文では、の情報は紹介されていない。日本人女性が外国人男性と結婚させられたという情報である。これも実は新情報だったのだが、外国人男性と結婚した拉致日本人女性の存在は日本では知られていなかったようである。「拉致事件関連資料」にもそれらしい女性は見あたらない。当然である。それ

ぞれの拉致日本人が北朝鮮でどんな境遇にあるか知る由もなかったのだから。和田氏が金賢姫の証言を否認するさいにこの件だけを引用しなかったのは、それが、金賢姫証言を「すでに問題になっているケース」による創作ときめつけるうえで邪魔になると判断したからではないのか。

犯人（金正日）が拉致について自供した現在、金賢姫の以上の証言は、基本的な点で真実を反映していることが判明した。海辺で拉致され、北朝鮮で結婚式をあげたカップルとしては、地村夫妻・蓮池夫妻が実在した。「拉致事件関連資料」にも出ていない曾我ひとみさんは、外国人男性と結婚していた。心がきれいで大工仕事をよく手伝ってくれた人とは、「拉致事件関連資料」でも推測しているように、地村さんのことではないか。北朝鮮による拉致犯罪の解明にあたって、金賢姫は重要な生き証人である。

## 検証二 安明進の直接証言の検証

次は安明進（アン・ミョンジン）の各種の証言である。こちらの証言はかなり複雑である。はじめ、安明進の証言は、日本の複数のジャーナリストの手によって間接的につたえられた。石高健次『金正日の拉致指令』（朝日新聞社、一九九六）、石高健次『それでもシラを切るのか北朝鮮』（光文社、一九九七）、高世 仁（たかせ ひとし）『娘をかえせ 息子をかえせ』（旬報社、一九九九）などがそうである。安明進自身も『北朝鮮拉致工作員』（徳間書店、一九九八、徳間文庫、二〇〇〇）という手記を刊行している。

和田氏は、『世界』に『「日本人拉致疑惑」を検証する』を掲載する時点で、右の安明進の諸証言のすべてに接していたわけである。安自身の直接証言である手記以外はすべて三重、四重の伝聞情報である。

### 安明進の手記『北朝鮮拉致工作員』

安明進の手記『北朝鮮拉致工作員』は、拉致問題だけをあつかっているわけではないが、日本人拉致問題についてもきわめて重要な情報を提供している。記されている事件を列挙してみる。

一九七〇年代に新潟から拉致されてきた日本人少女にかんして九七年に証言したことがある（文庫版、二八ページ）。

金正日政治軍事大学の校内で拉致された日本人六名、分校・招待所・九一五病院にいる日本人を含めると十数名を自分の目で見た（二八）。

一九八八年一〇月一〇日、男女の複数の日本人教官を目撃した。女性は三名。そのうちの一人は「新潟で拉致の少女」で、二六―二七歳に見えた（一四―一五一）。

上記の女性が別のタバコを吸う日本人女性と一っしょにいるのを目撃。

一九九〇年七月か八月、大会議場でタバコを吸う二人の日本人を見かけた

(一六二—一六六)。

タバコを吸う日本女性を見た(一七三—一七四)。

一九九一年、怪我で入院した九一五病院で日本女性に会った。のち、日本の記者が見せた写真によく似ていた(一七五—一七九)。

一九六〇年代半ばの能登半島での拉致事件。少年を含む三—四名、最年配の日本人は抵抗したため、その場で射殺(一八〇—一八一)。

本校にいた当時五〇歳ほどの女性、身長一五五くらい。

九一五病院で七〇歳くらいの日本人らしい男性を見た(一八七)。

和田氏が別の問題に関連してのべたことをかりれば、安明進自身の手記は「・・・本人の経験であるので、目撃証言としても一級である」(下、一五一)はずの証言である。

しかるに、和田氏はこの拉致工作の現場にいた安明進自身の手記＝直接証言にはほとんど眼をくれない。それまでに日本のジャーナリストたちを経て間接的にもたらされていた間接証言や伝聞情報よりもはるかに価値が高いと考えられるにもかかわらず。

和田氏が安証言の「検証」にさいしてまずおこなうのは、安明進の**間接証言**や**伝聞情報**の「**進化**」のあとをたどる作業である。その「検証」作業が『世界』誌の五ページを占める論文(下)のうち**大半(一二ページ)**を占め、**直接証言である手記の吟味には半ページ**ほどしかあてられない。氏の「検証」作業の性格がうかがい知られる。

ここでは、氏の「検証」作業で末尾で軽くあつかわれている安明進氏の直接証言にたいする「検証」を先に吟味してみよう。

氏が主に注目するのは、横田めぐみさんにかんする部分、つまり、証言である。

氏は、「一九九七年年頭、日本のあるマスコミの記者に新潟で拉致された日本人少女の話をした時は、まだ彼女の名前を知らなかったし、日本でこの事実がどれほど知られているのかもまったく無知だった」という部分を引用した(ただし、原文では「年頭」ではなく「初頭」、「名前を」ではなく「名前も」)上で、その「最

初の書き出しからして**事実**に反する」とし、さらに「**横田めぐみさんの拉致**という**大きな新聞記事**を前に出されて、**彼女を知っていると言った**のである」と断定する（下、一五六）。

しかし、安のその部分の記述（かれのまさに目撃証言）を「**事実**に反する」と判断する根拠はまったく示されていない（原文画像右ページ中段中央以降）。いずれの断定も憶測にすぎない。いつ暗殺されるかもしれない状況下で実名も写真も公にして証言している証人にたいするこのうえない非礼である。せめてなにかそう判断する根拠を示すべきではないのか？　まるで歴史家和田がそう判断することがなにより根拠だと言わんばかりである。

### 横田めぐみさんのえくぼ

つぎの批判は、めぐみさんの「えくぼ」説に向けられる。

そこには根拠らしいものが示されている。安明進は一九九七年三月のインタビューでの談話（後述）ではえくぼに言及していなかったのに、手記には「彼女が笑うと深く窪んだえくぼ」が「心優しい印象を与えていた」と記されているという点である（一四一）。和田氏がそこでもちだしている九七年の談話なるものは、氏が言う「三重の伝聞」である。どちらがより証言力が強いかは明白である。しかし、氏はこだわる――「えくぼが印象的なら、**なぜ最初に言わなかったのか**。」　まえに語っていないことを後で語るといふ理由で新証言に疑惑をいだくという手法は金賢姫の場合と同じである。あとで思い出さずにはいけないのか？　しかも、九七年に安明進がえくぼがあったかと問われて否定したというのならともかく、その点についての吟味もなしに（情報伝達者に問い合わせれば、つまり、「取材」すれば、簡単に確認しうること、少なくとも後述するように高世氏がそのことに気づくまではだれもえくぼを問題にしていらない）、**「時が経つにつれて、描写がこまかくなり、ついにえくぼの存在まで発見する」というのは、逆に真実味がとぼしい**」（一五六）などとがめるとは！

氏のえくぼ説へのこだわりはそこできかない。安証言についての最後の証拠調べではつぎのように記す。

「じつさい母親の横田早紀江さんすら、えくぼのことを聞かれて、「めぐみにはえくぼがあったかしら」と考え込んだほど、目立たないものであった。」

『娘をかえせ 息子をかえせ』を書いた高世 仁氏によれば、氏は、**安明進のえくぼ説の当否を確かめるために**、安の手記のゲラを読むとすぐ横田滋氏に電話をかける。めぐみさんにえくぼがあったかという高世氏の問いに、**横田氏は、「ありましたよ」と答え**、さらに、その事實はマスコミにも警察にも語ったおぼえがないと回答したという。そこで氏はすぐに横田夫妻を訪ねる。横田早紀江さんは、えくぼのことを聞かれると、確かに和田氏が記すように、「えくぼなんてあったかしらね」と、言いながら、アルバムをめくり、めぐみさんの小さい頃の、はつきりえくぼが確認できる何枚かの写真を見つけた。そして早紀江さんは「そうそう、あの子、笑った時にキュツとほっぺたがくぼむのね」語った。高世氏の著書から関連部分を画像データで示すので、読者は当否をぜひみずからの目で確かめてほしい（原文画像<sup>138</sup>）。和田氏は、上記の横田夫妻によるえくぼの確認の事実を隠している。滋さんは娘にえくぼがあるのをおぼえていた。早紀江さんは忘れていたが、あとで幼時の写真を見て思いだした。これが事実なのである。いずれが真実をつたえているかは横田夫妻に「取材」すればすぐに判明する。

高世氏は歴史学者でないにもかかわらず、ジャーナリストとしていかに報道の信憑性を重視し、データの検証を大事にしていたかがわかる。和田氏は、裏をとるという作業（関係者への取材もその仕事の一部）はまったくしていない。

最後に、少女が船倉に閉じこめられて、壁などを引っかいて手が血だらけになったという記述が問題にされる（原文画像<sup>139</sup>）。その部分の安証言は、例によって「この本でつけ加えられた」として虚言のようにつかわれる。それどころか、「**これはみてきたようなフィクションであろう**」とまで極言する（一五七）。例によってそう判断する根拠がなにも示されておらず、たんに想像力を働かしているにすぎない。

安明進の直接証言＝手記についての論及はそれで終わりである。安明進の手記には先に見たように、拉致に関する数々の重要証言が含まれているのだが、氏はそれには見向きもしない。これが一級の直接証言にたいする歴史家の態度として妥当

であろうか？

手記の信憑性にかんする氏の結論はこうである。「安明進の証言の進化のあとを、一九九四年、一九九五年、一九九七年、一九九八年と系統的に点検すれば、信頼度が低いものと結論せざるをえない。」（一五八）

## 検証三 安明進間接証言Ⅱ伝聞情報の検証

和田氏が『世界』論文（下）の全一五ページのうち大半をさいているのは、安明進の直接証言Ⅱ手記に先だつて、日本のジャーナリストを通じて日本で報道された安明進の証言である。要するに、そのすべては安自身が直接、自分の責任において公にした証言ではなく、インタビューでの談話なのである。インタビューの質問事項、両者の記憶、通訳を介する場合は通訳者の能力、伝達者（記事執筆者・調査報告者）の記憶の当否、伝達内容の確度の高低、脚色の有無、等々によって「証言」なるものは大きく影響を受ける。

しかるに、氏は、みずからが「三重の伝聞情報」と評価する（下、一四六）、安氏にたいするインタビューでつたえられた情報の問題点、情報の非一貫性とか食い違いなるものにどこまでもこだわり、安の間接証言とその伝達者に疑問を投じる。その作業が氏の「検証」作業の主要部分を構成する。

### 横田めぐみさん拉致疑惑をめぐって

和田氏の「検証」は、主として横田めぐみさん拉致疑惑にかかわっておこなわれる。では、一九九四年、一九九五年、一九九七年、一九九八年の「安明進の証言の進化のあと」とはなにか。つぎにそれを検証してみよう。

一九九四年の証言とは、どうやら『月刊朝鮮』の一九九四年一月号の金容三記者のインタビュー記事のことと思われるが（上、六四）、和田氏はそこでは、別に安明進の証言にコメントらしいコメントは加えていないので、氏がそこでなにを問題にするつもりなのか不明である。したがって、この証言問題は無視する。

**一九九五年の証言**とは、どうやら石高健次氏の同年の六月と十一月のインタビューにたいする安明進の回答のことであり（下、一四四）、**一九九七年の証言**とは、どうやら

同年二月の高世仁氏の安にたいするインタビュウのことである（下、一五〇以下）。

和田氏がまず問題にするのは、**横田めぐみさん情報を中心とする金正日政治軍事大学内での場面である**。安明進の一九九七年の証言は、一九九五年の証言とは「あまりに異なっている」といのである。その論拠の最初は、まずつぎのような前提的憶測。

「亡命した作業員は、亡命直後に安企部（韓国の―藤井）に北朝鮮について知っていることをことごとく供述させられるので、**安は九三年の亡命時点で、重要なことはすべて思い出させられていたはずである**。」

そして、「とすれば」と次の結論的命題につなげていく。

「**九五年に記憶になかったことが九七年に記憶の中に浮かび上がる**ということはあるだろうか。」（下、一五一）

しかし、「亡命した作業員は、亡命直後に安企部に北朝鮮について知っていることをことごとく供述させられる」（和田氏はどうしてそういうことを知ったのか？）の**事実であったとしても**、「安は九三年の亡命時点で、重要なことはすべて思い出させられていたはずである」とするのはいかがなものか？ その推定には根拠があるのか？ 安は安企部にたいして、日本のめぐみさんをはじめとする拉致被害者についても供述をもとめられたのか？ 韓国当局が質問しているのに安が答えなかったとか、否認したというのなら問題であろうが。

このたぐいの推論的論法が安の「証言」の食い違いなるものについての氏の以下の検証作業の全体をつらぬいている。

安明進の一九九七年の証言とは、高世氏がつたえたつぎのような情報である。（原文画像150-53）

横田めぐみさんの写真を見て、見覚えがあるとのべたこと。

横田めぐみさんは、作業員の日本化のための教師として働いていた。

横田めぐみさんもいたある記念式典の会場で、彼女を新潟から拉致してきたという事実を拉致してきたという教官当人から聞いた。

## A めぐみさんの写真

和田氏は、一九九五年には安明進に横田めぐみさんについての記憶がなく、一九九七年に横田めぐみさんの**写真を見たら、にわか**に**記憶がよみがえった**というのは不自然であるとする。氏はそれを「もつとも深刻な疑問」として問題にする。安明進は九五年の石高氏のインタビューのさい、「女性の写真を示されて、見覚えがないか」と聞かれたとき、「ありません・・・」と語っていたにすぎない。ところが、九七年には、「横田めぐみさんだという女性を式典のさいに見たとして滔々と話しているのである。」と。

(下、一五一)

「滔々と話して」いたかどうか和田氏はどうしてわかるのか不思議であるが、これはことばのあやとして無視しよう。

安が九五年に写真を見ても記憶がよみがえらなかつたというのは、私には別に不自然に見えない。問題はかれがどんな写真を見せられて、そう答えたかであろう。

石高氏によれば、氏が横田夫妻とともに安と会って、めぐみさんの「写真数枚」を見せたさい、安は「一枚一枚過去の記憶をたどるように考え込みながら」見ていき、「**その中の一つを指して「これがよく似ている」と両親に示した**」という。両親がもっている「**もつとも新しい写真**だった」という。(『これもシラを切るのか北朝鮮』、一五八)

逆に言えば、数枚の写真のうち最新のもの以外では安はめぐみさんと判断できなかつたわけである。九五年に安が見た写真がそれと同じもの、つまり最新の写真であつたというのなら、たしかに安の記憶に疑問をいだいてもいい。石高氏が九五年一月に安に示した一四枚の写真の中に含まれていたものはそれと同じだったか？ 和田氏はそのことを確かめるべきであつた。しかし、氏はそれをしていない。

かりに同じ写真であつたとしても、そのときは思い出せなかつたといこともありうる。

和田氏自身、別のところで、「**記憶が次第に蘇り、細部まで鮮明になつていく、忘れていたことを思い出す、言いたくなかつたことを話し出す**」いろいろな経路で、人間の語ることは変化していくものだ。「(『日朝交渉再開は、いま、なぜ必要か』)『世界』二〇〇二年一月号、二〇一)とのべているではないか？

## ㊦ めぐみさんの入院と教師活動は矛盾？

ついで和田氏は、石高情報（『現代コリア』論文）では、横田めぐみさんが「精神に破綻をきたして」、「病院に収容されていた」とあるのに、九七年にはめぐみさんが「作業員の日本人化のための教師として働いている」とするのは、「大きく修正したものである。」とする（一五一）。

なぜ「修正」なのか？ 同じ人物が教師として働きながら、精神に破綻をきたして入院するという事態はありえない事象なのか？ 同じ人物について、まったく同じ時間に、一方で入院していたとし、他方で、授業していたとする証言であるなら、それは絶対におかしい。この場合は違う。証言内容がちがっていてもかまわない。めぐみさんが入院していたのがいつかは石高情報では触れられていない。一方、めぐみさんが教師をしているとされるのは、安の在学中で一九八八―一九一年にかけてと時期が示されている（原文画像150-53）。

## ㊧ 拉致実行教官について

つぎに和田氏が問題にするのは、安は九五年には、拉致してきたという大学の教官がいつどこから拉致してきたかには答えなかつたとしているのに、九七年には、質問攻めして、新潟の海岸から拉致してきたという詳しい経過を聞いたと語っているのは、証言の食い違いであるとする。また、九五年には安が拉致教官の姓をペだと言いながら、横田夫妻との会談では**ジョン**だとしていることを問題にし（後者の会談は、石高健次『これでもシラを切るのか北朝鮮』で紹介されているもの一六三）、**後半の記述は前半の「修正」**であるとし、「あるいは**別人だ**というつもりであろうか」と反問する（一五三）。

吟味してみよう。

九五年の証言（石高健次『金正日の拉致指令』第五章）では、安が問題の教官に会ったのは、一九九二年の春頃のこと、教官の名はペ・ドクアンかペ・ドンホーで、大学の一一期生、四〇代前半の人物とされる。

九七年の証言は、一九八八年一〇月一〇日の朝鮮労働党創立記念日の場面で、そこに出てくる教官は、姓がチョンとされている。つまり、**もともと別人**なのである。安明進の九五年と九七年との証言にはいかなる食い違いもない。**異なる時期に接した異なる教官について語っているだけのこと**だからである。和田氏は時期と状況の違いを無視して、あたかも同じ状況についての証言のようになっている。

#### ○ 金正日政治軍事大学内での日本人をめぐる情景

和田氏が次に問題とするのは**大学内での日本人をめぐる状況**である。

「九五年には、安は、大学では日本人は講義を会議室で自分たちだけで受けていた、その空いたドアから中をのぞいて、日本人の顔を見たと言言した。ところが九七年には、日本人は、大学の式典の会場に朝鮮人学生と一緒に入ってきたと言っている。」そして、「食い違いはあまりに甚だしい。」と（下、一五一）。吟味してみよう。

九五年証言とは、石高健次氏『金正日の拉致指令』に出てくるつぎのよう場面である。これを以下「場面A」と呼ぶ。

金正日政治軍事大学に、年に五、六回、日本人が集められていた。各種の記念日に党幹部による講義のとき。

日本人だけ特別の会議室で受講（主体思想について）していた。

私たちはよく通路からその会議室を覗いた。（原文画像ニ-147）

それがどんな時期の目撃かは明確には語られていないが、後述部分と同じ時期であるとすれば、一九九三年一月であろう。

九七年の証言とは、高世氏の『娘をかえせ 息子をかえせ』に出てくるつぎのような場面である。これを以下「場面B」とする。

金正日政治軍事大学での記念式典（労働党創立記念日）。

大会議場。

参加者は朝鮮人学生（前方の席）と日本人教官（後方）。

日本人教官の中に新潟からの拉致女性がいた。

一九八八年一月一日。

拉致教官名はチヨン。(原文画像150-53)

なお、安明進は直接証言である『北朝鮮拉致工作員』でも、「場面B」については右と同じ描写がなされている。ただし「場面A」は、手記にはでてこない。

このように、「場面A」と「場面B」は明らかに異なる。

「もっとも深刻な疑問」は、むしろ、和田氏がどうして**状況の違い**に注目しないかである。和田氏は、石高氏が『金正日の拉致指令』の文庫化にさいして、第五章の上記の出来事に関連する部分をリライトした点に注目し、安が日本人を見かけた機会を記述するのに、「文庫版では、日本人は式典に参加した、「彼らだけ特別の会議室に入れられて講義を受けることもありました」と**式典参加と特別室講義の二本立てで説明している**」と問題にする(一五八)。石高氏が**二本立てで説明している**のではなく、安の証言も、それをつたえる石高氏の情報も、**そもそも、はじめから、式典参加と特別室講義の二本立て**なのである。和田氏が、いったいなにを問題視しているのか、理解に苦しむ。

### ㊦ 拉致少女の顔立ち

和田氏が問題にする次の安証言は、『産経新聞』のインタビュー記事(一九九七年三月一三日)である。和田氏は、そこに、高世氏のインタビューでは語られなかった**新しい情報**が加えられていることを問題にする。そして、「これは、明らかに、二月はじめの証言にはなかった点で、石高氏が『諸君』四月号で語った**情報をとりいれたもの**だ**と思われる**」とする(一五三)。ただの推論である。論証作業をとまっているわけではない。

また、安が拉致少女の顔の特徴についてまえよりも詳しい描写をおこなっていることについて、「一ヶ月もたたないうちに、安の**証言は相当に進化**している」とし、さらに安が横田夫妻に語った新しい内容にかんしても「安明進の話が**どんどん詳しいもの**に**進化**していることがわかる」として、証言が詳しくなること自体を証言の信憑性欠如の証のように描く。この論法は、まえに検討した。あとの情報がまえの情報と食い違ってしまうのならともかく、まえよりも詳しくなっているということ疑問視するという手法

は、なぜまえにその新情報をつけなかったのかを問題にするのと同じ和田史学の手法である。

そういう和田氏は、別のところで実にこう語っているのだ。

「人の記憶が発展する、記憶がよみがえって詳しくなるということは十分理解できません」(『朝鮮有事を望むのか―不審船・拉致疑惑・有事立法を考える』、一五三)

「・・・語る情報が次第にふえてくるのは自然です・・・問題はどいうふうに語る情報がふえてくるいかです。おぼろげな話が次第にくわしくなっていく、一般的な話にディテールがくわわるといふなら、わかります。」(同、一五六)

「記憶が次第に蘇り、細部まで鮮明になっていく、忘れていたことを思い出す、言いたくなかったことを話し出す―いろいろな経路で、人間の語ることは変化していくものだ。」(『日朝交渉再開は、いま、なぜ必要か』、『世界』二〇〇二年一月号、二〇一)

安は九五年と九七年とで食い違った証言をおこなっているわけでない。ここは、顔立ちの問題である。安の記憶がよみがえって詳しくなり、記憶が次第に蘇り、細部まで鮮明になっているのではないのか？ 詳しくなっているというだけで問題になるのなら、和田史学は天に唾していることになる。

安明進の间接情報の信憑性に疑問を投じる和田氏の「検証」はほぼそれで終わりである。

以上の検証を通じての私の結論は、安明進の直接証言＝手記について、「信頼度が低い」とする**和田氏の検証と結論はまったく成り立たない**というものである。安明進の直接証言＝手記の信憑性を否認したいなら、別の方法によるべきである。私自身は、安の間接証言や直接証言の検討を通じてそこになんらの問題も見いださなかった。すなわに一級の証言として受けとめることができる。

安は手記に「私が書いているこの文書が事実なのか嘘なのかは、・・・遠くないうちに必ず事実として証明されると信じている」と記した(一三八)が、犯人自供後の現在では、それはみごとに証明された！

それどころか、安証言にはきわめて多くの貴重な証言が含まれていることがわかっ

た。

安明進も、北朝鮮による外国人拉致疑惑の解明と被害者救済に多大な寄与をなしうる得  
がたい生き証人である。

## 検証四 情報伝達者への疑惑

和田氏の「検証」作業はそれで終わりではない。つづいて、石高氏など伝達者の伝達行為が槍玉にあげられる。いくつかに注目してみたい。

### 石高健次氏にたいする疑惑

和田氏は、石高氏の雑誌『諸君』（一九九七年四月号）での西岡力氏との対談の中で少女拉致問題にかんする伝聞情報に注目して、それを引用したあと、「帰れなくてもいい、せめて両親の顔だけでも見せてくれと言った」（原文画像shokun-72）という情報が、石高氏の『現代コリア』寄稿論文ではのべられず、「こじつけに加えられたことに疑問を呈する。「それほどにくわしい情報をもっていたのに、それを伏せておいたのはなぜだろうか。」（下、一五二）。

石高健次氏になんらかの作を見いだそうとする作業である。

石高氏は和田氏が問題にする『現代コリア』への寄稿論文（一九九六年一〇月号）に『私が『金正日の拉致指令』を書いた理由』を執筆し、そこで日本の海岸で拉致されたという一三歳の少女についての新情報を明かした（情報源は不明）（原文画像ニ31-32）。石高氏の『金正日の拉致指令』（朝日新聞社、一九九六年一〇月刊行）には、確かにその話は出てこない。そこを和田氏は問題にする。

石高氏がその情報を知ったのが九五年六月だとすると、**それを九六年の本に書かなかったのはなぜか？**（石高氏は、その情報提供者に会ったのが一九九五年六月二三日であることを、のちの著書『それでもシラを切るのか北朝鮮』で明らかにしている（一六ページ）。）

一九九五年六月二三日に情報を得ていたのに、安明進にインタビューしたとき（石高氏のインタビューは、一九九五年の六月と十一月ー同上、一四四ページ）、**なぜ少女拉致について質問しなかったのか？**そして、和田氏はみずからの問いにみずからこう答えるー「石高氏は、安明進の受け答えからして、少女拉致のことを尋ねても無駄だと感じたのではなからうか。」（下、一四六ー一四七）こ

れは推論にすぎない。

新情報そのものの信憑性は問わないで、当該情報が新しく提供されたという「来歴」でその情報の信憑性に疑問を呈するという例の手法。和田史学では、**新情報は怪情報と同義**であるらしい。

これは和田氏が金賢姫や安明進の情報追加を疑問視したのと同じ手法である。

### 拉致情報工作の疑惑

つぎに和田氏が問題にするのは、佐藤氏をはじめとする一連の拉致疑惑追求者たちの、少女拉致情報をめぐる動きである。和田氏は、拉致疑惑伝播者にたいして、いふなれば情報工作疑惑を投じる。石高情報と佐藤氏とをめぐる氏のその面での「検証」作業は、ほぼ『世界』誌上で三ページにおよぶ。

和田氏は、右の石高情報にもとづいて事実調査をおこなった結果、「めぐみさんが北朝鮮に拉致されたことはほぼ間違いない」とした佐藤勝巳氏の『身元の確認された拉致少女』という文章（『現代コリア』一九九七年一月・二月号）に注目する。そこでの記述にもとづいて、和田氏は、佐藤氏が一九九六年一月四日の新潟の講演会のあとの懇親会でその拉致少女のことを紹介し、会場からの情報でそれが横田めぐみさんであると知ったという部分に言及しながら、「佐藤氏のこの説明には疑問が生まれる」と、つぎのようにのべる。

「佐藤氏の一月二日―四日の話し方からすれば、氏はそれ以前に横田めぐみさんが石高情報の少女だという**結論をえていたのである**。にもかかわらず、一月四日までそのことを公開せず、しかも一月二日―四日も・・・懇親の席で**なにげなく、ついでかのように**口に出したのである。自分が情報のソースになることを徹底的に回避して、**自分が拉致少女は横田めぐみさんのことだと断定したことを隠そうとして**いるように見える。」（下、一四七―一四八）

それらの推論や断定には疑問をおぼえる。根拠らしいものが示されていないからである。和田氏がまるで**佐藤氏の分身**であるかのような描写である。

また、佐藤氏が講演から帰って、少女拉致を報じた当時の『新潟日報』をとりよせたという記述に注目して、和田氏は、さきの引用文にすぐにつづけて、佐藤氏が

「帰京してからはじめて新聞記事を取りよせて、再確認したというのも疑問を与える。・・・記憶のみで新潟の少女が石高情報の少女だと結論できるはずがない。佐藤氏は新潟日報の記事を「二月一四日以前に見ていたと考えるほかないのである。」（下、一四八）

文意不明なところもあるが、佐藤氏が『新潟日報』の記事を「二月一四日以前に見ていたと考えるほかないとする根拠はなになのだろうか？ どうすればそのような推論・断定が可能になるのか私には理解できない。

つづいて、和田氏は「石高情報による横田めぐみさん拉致の主張」の流れをたどる。

議員秘書の兵本氏が「知り合い」からファックスで、石高論文と『新潟日報』の記事がとどけられたとしていることにかんして、「この知り合いの方とは、佐藤氏のことであろう」（青色の意味については後述―藤井）とか、「兵本氏は以前から横田氏の所在を調べていたはずである」とか、「兵本氏は、石高情報とともに、佐藤氏の発見も、現代コリアのホームページのことも知っていたと思われる」とか、「彼は横田さんの父親には一貫して佐藤氏がこの件に関わっていることを語らなかつた」とかの推論がならねられる。

つづいて、「議員会館という場所は、情報に信憑性を付与するにはよい場所だと言える」と、論旨とかわりがない、しかし石高情報をデマと思わせるような作為的な文言。

そして、「他方で、佐藤氏はこの件をすでに旧知の西村慎悟衆議院議員に持ち込んでいた」等々の諸命題を重ねたあと和田氏がくだす結論は、「つまり石高情報の少女は横田めぐみさんだと最初に発見した佐藤勝巳氏の文章は事が動き出してから出るように設定されているのである」というものである。

以上の記述部分で和田氏がなにを「検証」しようとしているのかかなり理解しにくい、叙述の全体をつらぬくのは、「検証」というより、石高＝佐藤＝兵本氏等が結託して「拉致少女＝横田めぐみさん」という情報を意図的に操作・流布しているかのように描こうとする姿勢である。

これに関連して、和田氏の『朝鮮有事を望むのか―不審船・拉致疑惑・有事立法を考える』に収録した「補筆」での、氏の「進化」にも注目しておきたい。

和田論文『「日本人拉致疑惑」を検証する』（『世界』一月号、上）の六二ページ下段一二行目、「・・・共同声明を発表した。」のあとへ、**日朝国交正常化交渉に「積極的に反対した」佐藤勝巳氏と『現代コリア』の人々にたいする批判が**一〇行ほど加筆されている。（原文画像84-85）

同六三ページ下段一行目。金賢姫の本の引用のあとの「・・・と結んでい  
る。」のあとへ、彼女の田口八重子を救うようにという主張は、「日朝交渉を牽制  
する」試みとし、その時点で「拉致問題がかなり広く押しだされている」ことに注  
目する二行、交渉再開に反対する金泳三大統領と、**日朝関係正常化にとりくもうと  
する加藤紘一氏に抗議する佐藤勝巳・西岡力の文書に言及する**四行、ならびにその  
加藤氏の動きにかんする補足情報約一・五ページ。（画像86）

現代コリア研究所の関係者の「日朝関係正常化」妨害工作について新たに加筆し  
ているのである。

### 和田氏の訂正

和田氏は、一年後の論文『日朝交渉再開は、いま、なぜ必要か』（『世界』二〇  
〇二年一月号）で、自論文にたいする批判に言及して、「**いくつかのミスもあつ  
たことは認めるが、取材したら、真実が分かるかと言えば、それを疑うところで歴  
史家は仕事をしていると申し上げる他ない**」と回答する（一九九一二〇〇）。氏は  
そこでは、それがどんなミスであつたかには言及していない。しかし、それから半  
年後に刊行された『朝鮮有事を望むのかー不審船・拉致疑惑・有事立法を考え  
る』で言及している（九九一〇〇）。右の引用文の**青色の部分**である（「補筆」  
に訂正文を挿入している）。その部分では、氏が築こうとした、石高⇨佐藤⇨兵本  
氏等による「拉致少女⇨横田めぐみさん」情報の意図的操作なる推論⇨砂上の楼閣  
の一部が瓦解したことになる。少なくとも、和田氏は、**根拠のない憶測を重ねてい  
たことを自分から認めた**のである。同じ著書の別のところでも、石高氏に「名前の  
間違い、年号の間違いなど、単純なミスを五点」指摘されたことをつたえ、「これ  
はすべて私のミスであつた」と認めながらも、「しかし、それはもとより私の論旨  
には関係がない」としている（一四八）。どんなミスかは示されていないので、は

たして「単純ミス」か、「論旨に関係がない」かは検証のしようがない。その検証は石高氏に託すほかない。

### 石高氏にたいする恣意的論難

石高氏の情報入手・伝達・公表にたいする和田氏の恣意的と思われる論難のたぐいを少し列挙しておこう。

\* 「この新証言の内容について一切言及していない」(下、一五二)

\* 「石高氏はすでに新証言の主が旧知の安明進であることを知っていた」(一五三)

\* 「横田夫妻の前では・・・安を弁護しなければならなかった。」(一五四)

\* 安の「証言内容は変化しているのである。変化の理由を問いたださなかったのはジャーナリストとしての責任の放棄にはならないのであろうか。」(一五四―一五五)

\* 「このような追加情報まで・・・得ていたなら・・・本に・・・書かなかつたのは、やはり奇妙である。また・・・のも奇妙なことである。」(一五五)

\* 石高氏が横田夫妻にめぐみさん情報を直接つたえたときの夫妻の反応で、

「取材者であると同時に二十年ぶりに娘の消息を両親に伝える重い役割」をになつて夫妻を訪れた石高氏が、情報をつたえると、「滋は、身体を震わせて泣き顔になった。ガクツと頭を落とした。・・・母親の早紀江は、頭を横に振り大きく深呼吸した。」という記述してある部分について。

和田氏は、石高氏が「自分が・・・二十年ぶりの娘の消息を伝える」という役割を「果たしたかのように書いている」としたあと、先の「「滋は、身体を・・・」以下を引用して、「**これもおかしい**、すでに兵本達吉氏が二日に横田滋氏に会い、資料をわたしているのである。母親の横田早紀江さんの手記でも、二日こそ決定的な日であつたと書かれている。」(一五六)

なにが「おかしい」のか私には理解できない。石高氏は、二〇年ぶりの娘の消息を自分が最初につたえたなどと自慢しているわけではない。兵本氏が石高氏に先だつて横田氏に会つて資料を渡したのは事実である(高世「娘をかえせ 息子をか

えせ』四二―四三)。しかし、それは間接情報に石高氏のレポートだった。夫妻が石高氏に会ってあらためて情報をじかに聞いて激しく心を揺すぶられただろうことは、私にはよく理解できる。

最新の現代史をあつかっているのである。生き証人はいっぱいいる。「取材したら、真実が分かるかと言えば、それを疑うところで歴史家は仕事をしていると申し上げる他ない」などと居直らないで、「取材」、つまり、照会、証人にあたってきたんと証拠調べをすれば、いずれも避けられたミスであっただろうに。

## 検証五 批判者にたいする反論

――「最大の疑問点」＝錯覚？

### 佐藤勝巳氏批判

佐藤勝巳氏は『諸君』の二〇〇一年四月号に『いい加減にしなさい和田春樹センセイ！』という批判論文を掲載した。

その主たる内容は、第一に少女拉致情報の意図的操作にたいする和田氏の疑念への本人からの説明と氏の恣意的な資料操作にたいする批判である。第二は、和田氏の拉致疑惑「検証」にたいする佐藤氏なりの検証である。その批判にたいする和田氏の対応を吟味する。

批判者にたいする和田氏の対応が公にされるのは、一年後の論文『日朝交渉再開は、いま、なぜ必要か』（『世界』二〇〇二年一月号）においてである。和田氏はそこで、佐藤氏の反論をはじめとしてさまざまな抗議や意見表明があったとしたあと、つぎのように記している。

「もつとも頻繁に提起されたのは、私が佐藤勝巳氏や石高健次氏に取材をしないで、批判的な文章を書いたということであった。いくつかのミスもあったことは認めるが、取材したら、真実が分かるかと言えば、それを疑うところで歴史家は仕事をしていると申し上げる他ない。」（一九九）

これは一種のごまかしである。批判者の主眼は、氏が取材をしなかったという点にあるのではなく、氏の記述にさまざまな事実誤認があるのを指摘した上で、その誤りは関係者に「取材」して確かめれば避けられたはずだという忠告にある。氏もいくつかのミスがあったことを認めているが、それこそきちんと「取材」していればおかさにすんだミスだったはずである。つまり「取材」によって「真実が分かった」はずである。しかも、佐藤氏に指摘された事実誤認については、二〇〇二年七月に刊行される『朝鮮有事を望むのか――不審船・拉致疑惑・有事立法を考える』所収の「補筆」で訂正をおこなっている（前述の青色の部分）。

続いて佐藤氏の批判は、安明進などの拉致疑惑証言にかんする和田氏の「検証」作業に向けられ、氏の「検証」作業を丁寧に検討する。しかし、和田氏は、その面での佐藤氏の批判は一顧だにしない。まったくの無視である。私自身の上記の検証からすれば、和田氏にたいする「意図的な資料操作」という佐藤氏の批判はきわめて的確な指摘に読めるのだが。

佐藤氏は、「こういう資料操作をすれば、**どんな結論でも「創作」することが可能になります**」、「こういうことをやり出しますと、**先生の書いたものの全てが信用できない**ということになります」、「**事実、小生が指摘した・・・記述部分は、事実関係をねじ曲げた独断と偏見に満ち満ちたもので到底批判に耐えうるようなものではありません**」など痛烈な批判をあげている（一八四）。歴史家として無視してすむような批判ではない。「取材」しなかったというような批判にはわざわざ対応しているのに、もつとずっと重大な、場合によっては名誉毀損になりかねないような批判は歯牙にもかけないというのは、奇異である。

### 石高健次氏批判

『朝鮮有事を望むのか―不審船・拉致疑惑・有事立法を考える』によれば、和田氏の『世界』論文掲載の直後にそれをめぐって私的な形で論争があったようで、当該著書でその経緯が明らかにされている。

そこには「批判者に答える」という新たに執筆された一節もある。氏によれば、批判の多くは同工異曲で、和田氏が関係者に取材をしないで論文を書いたことを不当とするものであったという（一三七―一三九）。批判がそれだけのものであったかどうかは、その内容が不明なのでここでは問題にできない。

**石高氏は三一点の疑問**を氏につたえてきたという。相当の数である。私自身の和田論文検証でも相当の疑点があったのだから、当然と思われる。しかし、和田氏は石高氏が提起した三一点の疑問点を明らかにしていないので、第三者としては当否を吟味しようがない。和田氏が石高氏への反論を公にしたからには、両者の論争をもはや非公開にしておく必要がないと思われるので、石高氏にはぜひ三一点の疑問点を含む和田批判を公にしてほしいと思う。

ここでは、和田氏が「最大の疑問点」とした問題にのみ注目したい。氏が「和田春樹の石高氏メモに対する意見」としてとくに用意した一節での記述によれば、こうである。

「肝心なことは、石高氏が九五年一月に安明進から聞き取りをして九六年の本に書いた金正日政治軍事大学の様子、日本人拉致についての情報と、安明進が九七年二月―三月に高世氏、横田夫妻、石高氏に語った金正日政治軍事大学の様子、日本人拉致についての情報があまりに違って、疑問が生じるということです。」  
(一四八)

例の「場面」と「場面」の関係が氏の「最大の疑問点」なのである。

和田氏は、その前者の様子について五つの事項を、また後者については三つの事項をあげ、「二つの話はまるで違ってきます。大学の雰囲気が違うのです・・・到底同じ大学についての話と思えません。同じ大学についての話なら、矛盾していません。」(一五〇)

私はなんどもこの部分を読み返した。なんと読み返しても、和田氏がそこでなにを問題にしているのか分からなかった。氏にたいする批判者もきつと狐につままれた思いであったのでは？ 読者もぜひ自分の眼で当該部分を画像ファイルで確かめて欲しい(原本画像)。

安証言にもとづく九五年と九七年のそれぞれの状況の要約は、和田氏が「整理」しているとおりである。氏はまったく正確に「整理」している。ところが氏は、両「情報」があまりに違って、疑問が生じる」という(一四八)。どんな疑問か？ 安が九五年に話した先輩はペーで、九七年に話題にした先輩はチョンで、二人は別人なので、話が食い違っていても不思議はないというのが、石高氏の回答だったようで、私もその回答になんの問題も感じないが、和田氏は、「そんなことがありうるでしょうか」と反問する。

九五年の話(「場面」)と九七年の話(「場面」)はもともと別の事柄についてのもので、「二つの話はまるで違って」いても、不思議はない。「大学の雰囲気が違う」のも当然。大学は同じでも、別の時期の別の事柄(日本人向けの特別講義と日本人も朝鮮人もいっしょに参加する記念式典)なのだから。しかし、氏はそれが「到底同じ大学についての話と思えません。同じ大学についての話なら、矛盾し

ています」と言う。時期（九七年の証言）「場面」では、氏が正しく「整理」しているように一九八八年一月一日と**特定された日**であり、九五年のそれ（「場面」は一九九三年頃とされている）と状況（行事内容は**授業と記念式典**、**拉致実行教官は別々の職員**）が違っていれば、大学が同じでも、「雰囲気」（具体的な場面のことであろう）が違ってもなんの矛盾もないのではないか？ それを矛盾、食い違いと言いつ張るのは、両者を、同じ場面（時期・状況を同じくする）についての食い違った描写と受け取っている（あるいはそのように描こうとする）からとしか考えようがない。

和田氏はその後も石高氏と非公開のやりとりをし、「最大の疑問」点について重ねて問いただす。しかし、石高氏は和田氏の疑点が理解できなかったであろう、拉致教官が別人でも少しも変ではないということだけ回答したようである。しかし、和田氏はどこまでも右の疑問点にこだわりつづける。そして氏は、石高氏にたいて、「そのことに無関心であるならば、人が語った言葉をそのまま信じているだけで、検証ということを知らないジャーナリストということになってしまします」とまで決めつける（一五三―一五四）。

石高氏への『和田の再反論』という一節の末尾では、和田氏は安情報の変化の問題に言及して、「問題はこういうふうに語る情報がふえてくるかです。おぼろげな話が次第にくわしくなっていく、一般的な話にディテールがくわわるといふなら、わかります」としたあとで、「しかし」として、つぎのように続ける。

「**話の設定、状況の説明がかわってしまふ**ような、つまり**別の話になる**ような情報の展開は、証言の信憑性を疑わせるものです」（一五六）。

状況の説明がわかる、別の話になる！ 理解できない、説明がかわったのでなく、もともと別の話なの！？

ほぼ一年後の論文『日朝交渉再開は、いま、なぜ必要か』では、この問題、つまり「二つの話」の違いについてつぎのようにのべている。

「しかし、安明進の話の変化はそういう変化（記憶の鮮明化ということ―藤井）ではなく、**まったく別の話で前に語ったことを否定している**のである。」（二

「前に語ったことを否定している」という部分に注目しよう。安明進の九七年の証言は九五年のその否定だというのである。九五年と九七年で安の「話の設定」、「状況の説明」が変わっている、**安は前言をくつがえしている、と見ているのである。**「場面」と「場面」はもともと別個のものなのに、氏は、**同じ状況、同じ場面についての異なる証言**だと思いきんでしまっているのである。

事態は明白である。そうとしか理解できない。まさに**大いなる錯覚**である。**テキストの誤読**である。「最大の疑問」はどうやら信じがたいような錯覚の帰結だったようである。その自分自身の錯覚に気づかないで、「検証ということを知らないジャーナリスト」などというレッテルを批判者にはりつけるとは！

和田氏にたいする批判者たちも、氏の「検証」がそうした錯覚の上に成り立っていることには気づかなかったようである。まさか大歴史家がそのような幼稚な勘違いにもとづいて大論文を『世界』に発表するとは思わなかったのではないか。

和田氏は、二〇〇一年一月号の『世界』論文以後、さまざまの批判者からのさまざまな指摘にもかかわらず、一年後の二〇〇二年一月号の『世界』論文でも、また二〇〇二年七月刊行の著書でも、みずからの錯覚に気づかない。

それどころか、本稿の冒頭でも記したように、拉致犯の元凶が一連の拉致被害者の氏名・身上を告白したことで、安明進の直接・間接の拉致証言の信憑性が事実でもって確認されたにもかかわらず、いまなお安証言に疑問を呈し続けている（『北のペレストロイカは成功するか』、『世界』二〇〇二年一月号）。実に不可解な姿勢である。

私は、いまでもなおそのことが信じられず、私のほうがとんでもない錯覚をしているのではないかと懸念している。

井)ではなく、**まったく別の話で前に語ったことを否定している**のである。「(二〇一)

「**前に語ったことを否定している**」という部分に注目しよう。安明進の九七年の証言は九五年のその**否定**だというのである。「場面」と「場面」はもともと別個のものなのに、氏は、**同じ状況、同じ場面についての異なる証言**だと思いきんでしまっているのである。

事態は明白である。**錯覚**である。**テキストの誤読**である。そうとしか理解できない。「最大の疑問」はどうやら信じがたいような**錯覚の帰結**だったようである。その自分自身の**錯覚**に気づかないで、「検証ということを知らないジャーナリスト」などという**レッテル**を批判者にはりつけるとは！

和田氏にたいする批判者たちも、氏の「検証」がそうした**錯覚**の上に成り立っていることには**気づ**かなかったようである。まさか大歴史家がそのような幼稚な勘違いにもとづいて大論文を『世界』に発表するとは思わなかったのではないか。

和田氏は、二〇〇一年一月、二月号の『世界』論文以後、さまざまの批判者からのさまざまな指摘にもかかわらず、一年後の二〇〇二年一月号の『世界』論文でも、また二〇〇二年七月刊行の著書でも、**み**ずからの**錯覚**に**気づ**かない。

私は、いまでもなおそのことが信じられず、私のほうがとんでもない**錯覚**をしているのではないかと懸念している。

## 終わりに

和田氏の「検証」作業を自分なりに検証する過程で、私は否応なしに三五年ほどまえのロシア史研究会内のある出来事を思い起こさずにいられなかった。私も敬愛していた菊地昌典氏（故人）が「中公新書」の一部として刊行した『ロシア革命』が問題になった出来事である。

和田氏は、長尾久氏とともに当時、会誌『ロシア史研究』（一九六七年、第一六号）に菊地批判の論文を書いた。『菊地昌典』『ロシア革命』（中公新書）について」と題する二六ページにもおよぶ論文であった（長尾氏の論文は『菊地昌典』『ロシア革命』（中公新書）を批判する」と題され、二八ページ）。同号はまさに菊地昌典『ロシア革命』批判の特集号であった。

そこで和田氏は、菊地氏の『ロシア革命』に見られる数々の重大な事実誤認、ソ連の歴史書の誤読・誤訳を実証的に明らかにし、「検討からの結論を書くとするれば、本書は書かれるべきでなく、出版されるべきでない書物であるといわざるをえない」と結んだ。（七九）

また、「編集後記」では、和田氏は、ロシア史研究会が「権威をおそれず、忌憚なく討論、批判をおこなう態度」、「史料の分析に基いて、事実の復元に固執する方法」をはぐくんだこと、菊地氏がそうした学風の確立に寄与した「会の魂」ともいべき存在であったことに言及しつつ、その「氏が・・・会風からは考えることのできないような仕事をした」ことを自己批判的に悲しむ（八二―八三）。（中公新書『ロシア革命』は著者自身の判断で絶版にされたいが、リコールされたわけではないので、他に普及書がないため公共図書館ではいまでも読まれている。）

『世界』の岡本編集長にたいする佐藤勝巳氏の質問に、岡本編集長はつぎのように答えたという。

「和田春樹氏の論文は、一読すれば分かる通り、公開された文献にあたり、それを『テキスト』として読み込んで、テキストにある差異、変遷に注目しながら、解釈するという方法をとっています。和田氏は、歴史研究者であり、この論文では歴

史研究と同様な手法を用いています。」（佐藤勝巳『いい加減にしないで和田春樹センセイ！』、『諸君』二〇〇一年四月号、一八五）

編集長の眼力が問われよう。和田氏の論文は、「一読すれば分かる通り」、推論と恣意的断定に満ち満ちている。それが分からないようでは、編集長として失格であろう。加えて、「拉致問題」にたいする『世界』の姿勢は客観的ではなく、傾向的である。「拉致問題」について真実を究めようとする姿勢があるなら、反論を掲載するとか、誌上対決を企画するとかの方法もあったはずである。しかし、『世界』の対応は「拉致問題」に疑惑を投げるただの感想文のたぐいを掲載するだけであつた（野田峯雄『日本人「拉致疑惑」の現場を歩く』、同誌三月号）。

言論界の良識を体現しているはず（『世界』の愛読者はそう信じていたはず）の『世界』の名誉ある伝統を汚した責任は大きい。

歴史学者の和田氏、『世界』編集長の岡本氏がどのように責任をとるか注目していきたい。

（二〇〇二年一月八日 脱稿）